

# 友の会だより

孺恋郷土資料館

2011年11月2日

No 11

ボランティアガイド養成講座 ①

孺恋村にやってきました

「ポンペイの人型！」

資料館のボランティアガイド養成講座が9月と10月、2回にわたって行われた。このうち9月25日の講座は、講師に関俊明氏を迎えて午後1時



リアの世界遺産である古代都  
しかも孺恋郷土資料館に常設  
2002年、日本の調査団に加わ  
がら、「ヴェスヴィオ火山の噴  
たな財産」などについて話をし

半から資料館3階で開講。関氏はまず、イタ  
市ポンペイ遺跡の人型模型が、この日本の、  
展示されることになった意義と喜びを語り、  
って、現地で発掘に携わった経験を踏まえな  
火」「古代ローマ都市ポンペイ」「郷土の新  
た。ここではその概略を紹介した。

**目撃されたヴェスヴィオ火山の噴火** 西暦79年8月24日—ポンペイをはじめカンパニア諸都市に甚大な被害をもたらした激しい地震から、実に17年後のことだった。今度はヴェスヴィオ火山が大噴火し、膨大な量の軽石・火山灰が降り続き、翌25日には大火砕流が発生、都市は完全に埋没してしまった。当時の様子については、ローマの将軍で、自然学の研究者でもあった大プリニウスが科学的調査を実施、途中、火山性ガスによって窒息死するわけだが、彼の調査結果は甥の小プリニウスによって、書簡として歴史家タキトゥスに伝えられ、それが唯一信頼できる記録とされている。

**古代ローマ都市ポンペイ** 火砕流によって一瞬のうちに地中に埋もれてしまったポンペイは、ヴェスヴィオ火山から距離にして約9キロ、さらに古い時代の噴火による溶岩丘の末端部に築かれた周囲が3・4キロ、広さ66畝の古代都市である。西暦79年の噴火のときは、たった19時間で人々が生活していた、そのまま完全に埋もれてしまった。1748年に発掘（当時は宝探しのような乱掘とも言える調査であった）が始まってからは、繁栄していた古代ローマ時代の、建物から、人々の日常の生活まで、そのままが現れ、学術的にも、美術的にも、どれも目を見張るような見事で高度な物ばかりであった。

**注目された日本調査隊の発掘** 2002年11月、京都の古代学研究所（当時）がイタリア政府の許可を得てポンペイの城壁外で発掘調査。掘ること地表下7.5、ポンペイ中を埋め尽くしていた軽石の層と火砕流サージとの境界辺りで二遺体を発掘。なんと一体の方の足首には鉄製の足枷（かせ）が付いており、もしかして奴隷？ ということでイタリアでも大変注目された。当資料館で常設展示されるようになったのは、もう一方の発掘遺体から石膏で型をとり、エポキシ樹脂で固めたものの模型である。因みに、イタリアの発掘日誌を調べると、日本隊の発掘遺体は1046体目になるとのことだ。

## 郷土・孺恋村の新たな財産

イタリアのポンペイ遺跡と、いわゆる浅間焼け遺跡との関係は、資料館開設当時の昭和58年7月、イタリア文化財省ポンペイ遺跡総監督のチェルツリ・イレツリ博士らが浅間焼け遺跡を視察。以来、孺恋村の鎌原遺跡は「日本のポンペイ」と言われるようになった。この7月25日から常設展示されている人型模型は実に当資料館の新たな財産であり、孺恋村の大きな誇りである。孺恋村の歴史とともに、防災面でも多大な役割を担うものとして、県内外からの来館者に大いに宣伝、孺恋村を宣揚していきたいものである。

## ボランティアガイド養成講座 ②

# 鎌原地区 史跡めぐり

ボランティアガイド養成講座の2回目は、10月23日午後1時半から、郷土史に詳しい地元鎌原地区在住の宮崎光男氏が講師として鎌原の集落を案内。鎌原観音堂の石段を上がりきった左右に、石柱に彫られた珍しい一對のこけし形地蔵があるのを紹介するなど普段、誰もが見過ごしてしまいそうな物や場所を、意表を突く形で紹介するなど、参加者の興味を引き、感動を与えた。今回は、これらのうち主な史跡・建立物などを巡ってみた。



★石田波郷句碑——「葛咲くや 孺恋村の 字いくつ」—松山出身の俳人石田波郷が昭和17年、孺恋村を徒歩で通りかかった際に詠んだもの。この村名を読み込んだ名句は、村制100周年記念事業の一環として、波郷自筆の文字を陰刻して資料館の前に建立された

★観音堂周辺——①観音堂への石段（現在残っている15段）を上り切ると、その左右両側に、たいていの人は今まで気付かなかったようだが、石の鳥居の廃材を利用して彫られたと思われる、珍しい台柱付きのこけし形地蔵が立っている。浅間押しより85年も前の元禄11年造立と彫られている ②観音堂に向かって左奥には、これもあまり知られていなかった馬頭観音像群がある。浅間押しの際、村内に残ったものをここに集めたものようだ ③観音堂の参道入り口左側には、文化12年(1815年)に建立された浅間焼け33回忌供養碑がある。これには当時の鎌原村の犠牲者477人のうち464人の戒名が刻まれている。近村の篤志家の援助によって建てられたもので、施主として大笹村の黒岩宅七（長左衛門）、干俣村の干川小兵衛のほか、中居村の黒岩幸右衛門らの名も見られる

★十日の窪——観音堂前の道を隔てて隣接する、今は民家の庭や畑になっている所が十日の窪と言われる地で、昭和54年に発掘調査が行われた。昔の村民の生活用品など約1200点が収集され、そのほとんどは資料館に収蔵、展示されている

★鎌原用水——昔は鎌原村の街道の真ん中を流れていた。昭和初期の写真でも宿場村当時の面影を残していたが、現在は道路の両側溝を流れている。この水は昔から冷たく農業用水に適さないため、別の用水を引いて合流させ、水温を上げて下流部の田畑に使った。このあたりに、かつて往還橋が架かっていた

★郷倉——浅間押しから5年後の天明8年に建てられたための土蔵。村を再建していく中で、浅間押しなどの天災や凶作に備えて粟やたと思われる。完全な形で残る村唯一の郷倉で、村の文化財に指定されている

境内の巨木——ここら辺りは、土地が高かったこともあり、浅間押しが及ぶ部分が多い。神社境内には浅間押し（天明3年）以前からの巨木が残っている。中には、350年の推定樹齢を誇るケヤキのほか、250年のカツラ、カエデ、モミジなどが林立する。



た備荒貯穀の稗などを蓄え

★鎌原神社

ばなかった部